

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 28 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520201

研究課題名（和文） 昭和文学の結節点としての福永武彦—古事記からヌーヴォロマンまで

研究課題名（英文） Fukunaga Takehiko, an essential literary figure of the Shōwa era : his world from *Kojiki* to Nouveau Roman

研究代表者

近藤 圭一 (KONDO KEIITI)

聖徳大学・人文学部・講師

研究者番号：60306454

研究成果の概要（和文）：

本研究では3回の公開研究発表会、2回の座談会、聞き取り調査、資料調査、翻訳などを行い、その成果を年次報告書『年報・福永武彦の世界』で公表しました。この活動により、福永文学とボードレールやロートレアモン等の仏文学との関わり、福永文学の詩的側面、或いは美術や音楽との関係を研究する上で、大きな進展がありました。また、本格的な評価がない福永の生涯について、多くの貴重な証言が得られました。3冊の『年報』は重要な文献に引用されるなど、高い評価を得ています。今後はこの成果を公刊し、一層福永文学の研究を深めます。

研究成果の概要（英文）：

These studies, which consist of three symposiums, two roundtables, interviews, documentations and translation, have been published in three annual reports. Through these activities, we contributed tremendously to clarify relations which Fukunaga had to French literature, in particular Baudelaire and Lautréamont, poetic aspects in his literary world, and his links with fine arts and music. We could note down precious accounts on the life of Fukunaga whose serious biography has been yet to come. Our three annuals are quoted in important papers, which reflects our increased status. We aim now to publish these results to enrich and go further into studies on literature of Fukunaga Takehiko.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：福永武彦、戦後文学、ボードレール、ロートレアモン、フランス文学、比較文学、比較芸術、学習院

## 1. 研究開始当初の背景

福永武彦の文学には、彼が後半生学習院大学仏文科の教授として研究対象にしたボードレールなどのフランス文学は勿論のこと、独・露・米など欧米文学からの幅広い影響が窺えます。一方で、彼は古典文学や

漢籍の素養が深かったことで、その流れの上に立った作品も残しています。さらに、絵画や音楽を大層愛好した福永は、文学作品の中にその要素を持ち込んでいます。福永武彦の文学にはこのように様々な要素が散りばめられており、その文学世界からは藝

術的香気が立ち上ってきております。

しかし、残念なことにその研究は立ち遅れておりました。本研究開始の時点では研究書は10冊にも満たず、その質も玉石混淆の状況で、論文発表も低調でした。一例を挙げれば、上記音楽との関わりについては、作品を一読すればそれが容易に感得できるにも拘らず、論文としては30~40年前に優れたものが二、三発表された以外には研究が進んでいなかったのが現状でした。また、詳しい評伝は今に至るも用意されておりません。その理由は、一つには余りに広範囲の影響関係を取り扱うために、それを丹念に考察することが容易ではなく、基礎的な研究が中々進められなかったためであり、また一つには自筆原稿や日記等の資料が公開されておらず、それどころか流出・散逸さえしていたためでもあります。そして、福永の創作世界を網羅し、それにきちんとした本文校訂を施した本格的な全集も刊行されておりません。

本研究は、余り良好とはいえない研究環境の中、福永文学の多方面に互る要素に考察を加え、資料を整備し、未だ詳らかではない伝記的事項を明らかにし、その豊穡な文学的世界を多角的に研究し、以てその本質に迫ろうとするものでした。

## 2. 研究の目的

前項で、福永にあっては欧米文学の要素と日本の古典や漢籍の影響と二つの要素が見られると述べましたが、これは福永のみならず日本の近代文学の作家たちに共通する事象であり、彼らにとってはこの2つの要素を如何に消化するかがその文学的営為にとって決定的に重要な課題でした。しかし、福永は、キリスト者の家庭に生まれ、明治と大正の文学を読んで育ち、長じてからロートレアモンという当時としては最先端の詩の世界に魅了され、堀辰雄との決定的な出会いを果たしたという経歴から、その2つの流れを一層先鋭的に意識しなければなりません。そして大正7年生まれということから、必然的に軍国主義と戦争という暗い時代に直面せざるを得なかった体験を持っています。その意味で、福永武彦の文学には、日本の近代文学、もっと細かくいえば昭和文学、或いは戦後文学の殆ど全ての要素を指摘することができるでしょう。

本研究は、このように日本文学の古典から西洋文学の前衛までを視野に入れ、美術や音楽の要素まで取り込んで独自の作品世界を生み出した福永武彦という一人の作家を取り上げ、その作品を精査し、作家の伝記的事項を調査し、延いては昭和文学の深奥を追究していくことを目的としました。

## 3. 研究の方法

上術の「1. 研究開始当初の背景」の通り、本研究開始当初の福永文学の研究は決して盛んではありませんでしたが、フランス文学者や詩人・小説家など、福永文学を高く評価する人は何人もおられました。本研究ではまずそのような有識者を招聘し、公開研究発表会でシンポジウムや講演会を行い、福永文学の特質を確認し、その再評価を図りました。上述の通り福永は大正7年生まれなので、存命であれば本研究開始の時点で91歳、シンポジウムにお招きした方の中には作家本人と親しく交わった方が多く、福永の人となりについてもお話し下さったので、大変有意義な会合になり、好評を博しました。

なお、研究発表会の際に研究代表者や研究分担者による発表を行い、研究成果を公表しました。写真は上から順に西岡亜紀(シンポジウム「福永文学の新しい可能性——20世紀文学を振り返る」)、山田兼土(シンポジウム「詩人たちが読む福永武彦」)、岩津航、近藤圭一(いずれも講演会「福永武彦・美術・文学」)の発表風景です。





また、作家ゆかりの方と座談会を行った取材したりして証言を得るといった研究も行いました。その記録は後述の『年報』で公開しましたが、ここには今まで明かされたことがない事実が多々ありました。前述の通り福永には本格的な評伝がなく、ゆくゆくはきちんとしたものを作成しなければなりません。この研究を通じてその準備作業が大きく進展しました。このような証言は時間との勝負で、今しかできないことです。現に本研究の前後で福永ゆかりの方が何人も亡くなっています。この種の調査は、科学研究費助成事業が終了した後も継続して実施していくつもりです。

精密周到に編纂された全集を持たない福永にあっては、資料を調査することも大切な研究です。本研究では福永武彦の伝話による卒業論文の一部訳出し、公開しました。

これらの研究活動は、年に一度、年次報告書『年報・福永武彦の世界』を刊行し、ここで公表しました。この『年報』は文学館、大学等の研究機関、図書館、出版社、報道機関、研究者など350箇所以上に配布し、希望者にも贈呈しています。次項「研究成果」に述べる通り、研究水準を向上させると共に、成果を社会・国民に説明しなければならない科学研究費助成事業の要請に応えたものになっていると考えております。

#### 4. 研究成果

上記「研究概要」に述べた通り、本研究は3回の公開研究発表会と2回の座談会を持ち、聞き取り調査や資料調査、翻訳などを行い、その成果を3冊の年次報告書『年報・福永武彦の世界』で公表しました。具体的な成果は次項に記した通りですが、この活動により以下の点において研究水準と研究環境が向上したものと思われま

(1) 福永文学に見られる外国文学からの影響、就中仏文学、特にボードレールやロートレアモンとの関わりについて、新しい研究成果を得ました。

(2) 福永文学の詩的側面について、様々な新しい見解が披瀝されました。

(3) 福永文学と美術や音楽との関聯について、大きな研究の進展がありました。

(4) 福永の生涯について多くの貴重な証

言が得られ、本格的な評伝を用意する環境が整備されました。

(5) 教師として、或いはフランス文学者としての福永について、価値ある証言が多数得られました。

(6) 福永武彦の伝話によるロートレアモンに関する卒業論文について、邦訳の一部を公開しました。

(7) 各所に配布した『年報』によって、これらの研究成果が広く伝わり、既に何か所も引用されるなど、研究環境の向上と研究の機運醸成に寄与しました。

(8) 本研究によって研究者相互の情報交換が進み、福永文学の魅力を伝播することができました。

(9) 反省点としては、『古事記』に代表される日本古典等の要素について、他の分野の研究のために、これに多くの時間を割けなかったことです。今後はこの部分の考察を深めようと考えています。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 23 件)

- ① 近藤圭一、福永武彦と音楽、年報・福永武彦の世界、査読無、第3号、2012、23～30
- ② 岩津航、福永武彦と美術、年報・福永武彦の世界、査読無、第3号、2012、31～35
- ③ 西岡重紀、作品の酵母としての卒業論文—翻訳作業の覚え書に、年報・福永武彦の世界、査読無、第3号、2012、75～77
- ④ 西岡重紀、「喪失」の表象のネットワーク—『死の島』のカタカナ使用とフォークナー・原爆文学、比較日文学教育研究センター研究年報、査読有、第8号、2012年、237～247
- ⑤ 山田兼土、「死の島」日記、年報・福永武彦の世界、査読無、第2号、2011、26～40
- ⑥ 岩津航、福永武彦『死の島』における橋—ワイルダーと玉堂をめぐって、比較文学、査読有、第53号、2011、105～115
- ⑦ 西岡重紀、〈聖なる〉響き—福永文学に共鳴するもの—、年報・福永武彦の世界、査読無、第1号、2010、4～11
- ⑧ 岩津航、福永武彦の「文学的行動」について、年報・福永武彦の世界、査読無、第1号、2010、12～17
- ⑨ 岩津航、北方の島と白い太陽—福永武彦『死の島』とボードレール、査読無、金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇、第2号、2010、47～60
- ⑩ 山田兼土、福永武彦の詩小説—研究ノートの、びーぐる—詩の海へ、査読無、第6号、2010、24～27
- ⑪ 山田兼土、書評「『現在』の表象として

の「幼年」 — 西岡亜紀著『福永武彦論「純粹記憶」の生成とボードレール』、日本近代文学、査読無、第81号、2009、377~380

〔学会発表〕(計 4 件)

- ① 岩津航、福永武彦と象徴主義絵画、日仏文化交流史研究会第4回研究会、2011年12月2日、東北大学
- ② 西岡亜紀、The Loss of a Symbol — Dialogue in Takehiko Fukunaga's *Death Island* and Modernism (英語)、国際比較文学会第19回国際会議、2010年8月19日、韓国ソウル市・中央大学校
- ③ 岩津航、福永武彦『死の島』における橋の表象 — ワイルダーと玉堂をめぐって、日本比較文学会第45回関西大会、2009年10月31日、立命館大学
- ④ 西岡亜紀、作品の酵母としての卒業論文 — 福永武彦 “Le Cosmos du poète — le cas Lautréamont” について、日本比較文学会東京支部例会、2009年11月21日、日本女子大学

〔図書〕(計 3 件)

- ① 山田兼士、濤標、詩の現在を読む 2007-2009、2010、249
- ② 近藤圭一他、生活ジャーナル社、ドラマチック・ロシア in Japan 文化と史跡の探訪、2010、200~219 [共著]
- ③ 山田兼士、濤標、百年のフランス詩 — ボードレールからシュルレアリスムまで〔編訳書〕、2009、152

〔その他〕

イ 年次報告書 (山田兼士編輯)

- ① 年報・福永武彦の世界、第3号、2012年3月
- ② 年報・福永武彦の世界、第2号、2011年3月
- ③ 年報・福永武彦の世界、第1号、2010年3月

《下記公開発表会や座談会、翻訳や聞き書き調査、或いは論考など、本研究が1年間で達成した成果を収録して、図書館・文学館・研究機関、或いは研究者、希望者等 350 箇所以上に配布して、広く社会・国民に発信した。》

ロ 公開発表会 (記録は上記『年報』に掲載)

- ① シンポジウム「福永文学の新しい可能性 — 20世紀文学を振り返る」  
2009年12月12日、午後2時開始、午後6時終了  
会場・後援 世田谷文学館  
来場者 33名  
総合司会 近藤圭一  
研究発表①「〈聖なる〉響き — 福永文学

に共鳴するもの」 西岡亜紀  
研究発表②「福永武彦の『文学的行動』について」 岩津航  
座談会「三〇年の時を経て — 福永文学の新しい可能性」

- 菅野昭正・清水徹・山田兼士
- ② シンポジウム「詩人たちが読む福永武彦」長田弘・阿部日奈子・小池昌代・山田兼士  
2010年7月24日、午後2時開始、午後5時終了  
会場 日本近代文学館  
来場者 35名
  - ③ 講演会「福永武彦・美術・音楽」  
2011年10月29日、午後2時開始、午後4時半終了  
会場 日本近代文学館  
来場者 47名  
総合司会 西岡亜紀  
研究発表①「福永武彦と美術」岩津航  
研究発表②「福永武彦と音楽」近藤圭一  
講演「福永武彦をめぐって」栗津則雄  
(司会 山田兼士)

ハ 座談会 (記録は上記『年報』に掲載)

- ① 福永武彦から池澤夏樹へ 魂のリレー  
池澤夏樹・田口耕平・岩津航  
近藤圭一・西岡亜紀・山田兼士  
2011年1月15日、午後2時開始、午後5時終了  
会場 日本近代文学館
- ② 学習院大学の福永武彦  
照木健・中川信吾・佐藤領時  
岩津航・近藤圭一・西岡亜紀  
2012年1月28日、午後2時開始、午後5時終了  
会場 学習院大学

ニ 翻訳

詩人の「世界」 ロオトレアモンの場合  
福永武彦著、西岡亜紀／岩津航訳・解題  
年報・福永武彦の世界、第3号、2012、57~74

《福永武彦が昭和15年12月に東京帝国大学文学部仏蘭西文学科に提出した、フランス語で書かれた卒業論文 “Le Cosmos du poète — le cas Lautréamont” の第1部の邦訳。》

ホ 聞き取り調査 (聞き手近藤圭一)

病床の福永武彦を診察して 小井土昭二  
取材 2009年7月25日  
発表 年報・福永武彦の世界、第1号、2010、64~67、及び69~70  
年報・福永武彦の世界、第2号、2011、70~73  
《福永の晩年2年間に診察した小井土昭二医師に取材したものに解説を加え、上記『年報』に発表したもの。小井土医師はさらに自ら短い回想記をお書き下さつ

たので、『年報』第1号の68頁に掲載した。なお、小井土医師は取材の翌年、2010年の暮れに逝去された。》

へ 引用文献・報道関連情報

- ①池澤夏樹「予め失われた主人公たち — 福永武彦における喪失と諦念」（北海道立文学館 福永武彦展『日は過ぎ去って僕のみは—福永武彦、魂の旅—』図録、2011年6月）《『年報・福永武彦の世界』第2号に掲載された近藤圭一による小井土医師への聞き書き「病床の福永武彦を診察して（下）」が引用されている。》
- ②神谷忠孝「戦後文学における福永武彦の位置」（同）《『年報・福永武彦の世界』第1号が紹介され、西岡亜紀と岩津航の前記論考（〔雑誌論文〕⑦⑧）とシンポジウム「福永文学の新しい可能性 — 二〇世紀文学を振り返る」（〔その他〕の「2. 公開発表会」の①）が取り上げられた他、『比較文学』誌に掲載された岩津航の論文「福永武彦『死の島』における橋 — ワイルダーと玉堂をめぐって」（上記〔雑誌論文〕⑥）にも言及している。》
- ③「福永武彦に改めて光 終戦直後の日記公開」（『日本経済新聞』2010年9月12日号）《福永武彦の戦後日記が公開され、研究が進展しつつあるという記事の中で本研究が取り上げられ、近藤圭一の名前とシンポジウム「詩人たちが読む福永武彦」（〔その他〕の「2. 公開発表会」の②）が紹介されている。》
- ④公開シンポジウムレポート「詩人たちが読む福永武彦」（『週刊読書人』2010年8月13日号）《上記シンポジウムの紹介記事。》
- ⑤近藤圭一「没後三十年、福永武彦を考える — シンポジウム「福永文学の新しい可能性」」（『週刊読書人』2010年1月29日号）《同紙編集部より依頼され、上記シンポジウムの概要を寄稿したもの。》

ト ホームページ

<http://members3.jcom.home.ne.jp/tfukunaga/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

近藤 圭一 (KONDO KEIITI)  
聖徳大学・人文学部・講師  
研究者番号：60306454

### (2) 研究分担者

山田 兼士 (YAMADA KENJI)  
大阪芸術大学・芸術学部・教授  
研究者番号：00191304  
岩津 航 (IWATSU KO)

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：60507359

西岡 亜紀 (NISHIOKA AKI)

お茶の水女子大学・比較日文学教育研究センター・客員研究員

研究者番号：70456276

(2009～2010：連携研究者)

(3) 連携研究者 なし